法然上人・佐用の腰掛石

瀬川久志

はじめに

岡山県美咲町の誕生寺は、法然上人誕生の聖地で、建久四年（一一九三）に弟子の法力房蓮生（熊谷直実）が、法然上人の命により、上人誕生の旧邸を寺院に改めたのが始まりとされている。誕生寺本堂の須弥壇の位置が、上人誕生の部屋のあった所だとされている。このことは、おそらく動かない事実であろう。武将熊谷直実は、家督を直家に譲ってから、建久四年（一一九三年）頃、法然上人六〇歳の時であるが、法然の弟子となり出家した。蓮生は、出家後間もなく、美作国久米南條稲岡庄の法然生誕地へ、法然上人自作の仏像を背負い、弟子を連れて法然上人の生家を目前にした時、号泣し感涙に咽んだと言う。

現在JR津山線が高架になり、その下を県道三七六号線が通っているが、線路を潜ってすぐのところに小川が流れており、橋がかかっている。Google 地図のストリートビューで見ることができるので、まずは予備知識を得ていただければ幸いである。その場所に、教育委員会の案内板が建てられている。法力房蓮生は、確かに法然上人の生家へやってきた。一方で、法然上人は上京後美作国へ戻った史実はないとされ、にもかかわらず、晩年に弟子に命じて寺院を建立させている。この時間の空白を、どのように解釈すればよいのか。話はそれるが、江戸時代に編纂された森藩の史書『作

陽誌』には、誕生寺から北東に二町ほどのところに法然上人の父親の漆間時国の館があったとされており、法力房蓮生が感涙に咽んだとされる場所のすぐ北に位置する。法力房蓮生は、果たして法然上人から、その場所のことを聞かされていただろうか。それはともかく、この誕生寺の地からはるか東の兵庫県の佐用町で、いまから三〇年前に、高橋良和によって、法然上人の腰掛石が偶然にも発見された。この「法然上人腰掛石[1]」（写真1）を再検証し、この答えの出ないかもしれない疑問の一端に答えようとするのが、本稿の目的である。

高橋の論文は、『浄土』の一九八八年の六月号に掲載されている。ということは、彼が、佐用町で法然の腰掛石のことを知ったのは、前年の一九八七年ではなかったかと思われる。筆者が、本稿を執筆しているのが二〇一八年一月であるから、すでに三〇年の歳月が経過しているのである。この間、法然の腰掛石は、佐用の山間部に真宗の檀信徒によって守られながら、ひっそりと息を潜めて眠っていたのである。筆者が、この腰掛石のことを知ったのは、二〇一六年のことである。

写真１　法然上人腰掛石の石碑

『作陽誌』における法然の出自

「法然の腰掛石」を検証する前に、まず法然の出自について、古文書からの引用を行なう。『作陽誌（全六巻）』は美作国の後年の近世森家の支配下で編集された歴史書であり、松平藩となってからの東作誌と併せて、同地の自然、寺社など地域事情を網羅した包括的歴史書である。『作陽誌』は「西作誌」と「東作誌」に別れ、前者は漢文白文、後者は「かなカナ」交じりの漢文で書かれている。この『作陽誌』によって法然の出自を訪ねるところから始めよう。古文（書き

下ろし）に変換すると次のようになる。本文の半カッコは筆者が補った。

「空は長承葵丑歳稲岡北庄栃社邑に産まる。栃社は地名にして一に曰く、空嬭の母は古曽女を名とする。栃と刀自[出自注1]とは倭訓[2]相通ず、刀自は女媼[3]の通称なるが故に栃社という。もって山号[4]となすは本に酬いる所以なり。未だいずれが是なるかを知らざるなり。雅州[5]に三家あり、海氏といい菅氏といい漆氏[6]という。古州[7]の民は三館公と称す。空はすなわち漆氏なり。其の先は仁明帝（天皇）後西三条右大臣元光に出ず。元光六代の式部太郎源元俊と蔵人平兼高と郤[8]あり。既にして元俊は陽明門側に於いてひそかに兼高を殺し、事発覚し故を以って作州にかくる。居ることこれを久しくし、久米押領使神戸大輔漆元国の女を娶り男を産む。元国に元　なく外孫を養として家を継がし初めて源姓に改め漆盛行と号す。盛行は重俊を生み、重俊は国広（校者曰く国広は一に国弘に作る）を生む。国広は時国を生む。すなわち空の家父なり。母秦氏もまた久米の名門なり。」（『作陽誌（西作誌）中』一二四-五ジ-）

出自注

1　とじ　中年以上の婦人を尊敬して呼ぶ語。

2　日本よみ

3　おうな　歳を取った女

4　誕生寺の寺伝では稲岡栃之助と社夫妻の名から山号が栃社となったとされている。山号のよみはとちこそざん。

5　中国にかつて存在した州

6　この「海」と「漆」は、『岡山県史　平安遺文第五巻』の「美作国留守所安堵状」（天承元年・一一三一年九月）に、漆には花押がないものの見えており、漆こそ漆間時国であったと解される。また誕生寺に安置されている法然の母親・秦氏の位牌には「海」の文字が記されている。この位牌は寺院建立の後年になって付け加えられたものらしい。

この点の詳細は、拙著『法然上人生誕の地　美作国に関する研究』（ＫＤＰ出版、二〇一七年）を参照されたい。

7　雅州と並ぶ州と思われるが詳細は不明。

8　いさかい　争そい

このように、勢至丸と伝えられた法然上人の幼名は「空嬭」であり、母の名は「古曽女」とされているのである。中里介山は『法然行伝』（筑摩書房、二〇一一年）において、おなじ『山陽誌』からの引用を試みているのであるが、なぜか「空嬭」「古曽女」の名は伏せている。ところで古曽の異形漢字が古曾であり、筆者はこの異形文字を使っている。現在、古曽の姓は岡山、和歌山、兵庫、大阪など、西日本に数十を数えるほどであるが、以上の検証から推測されることは、当時美作国に古曽を名乗る秦氏の構成員があって、その娘に当たるのが法然の母親ではなかったか。しかし、『山陽誌』では古曽女の父親は秦豊永という秦氏の構成員だとしている―この点の検証は別途行なう―ので、矛盾してしまう。あるいは、夜襲によって夫をなくした古曾女は、古曾を名乗るものと再婚したのであろうか。まったくのミステリーである。また、法然は、自分の出自に関して何を思い、何を考えて修行に励んだのであろうか。話がわき道へそれたが、ここで本題に戻ろう。

高橋良和の「法然上人腰掛石」発見

まず、高橋良和のレポートを紹介することから始める。彼は次のように述べていた。大意をとって引用する。

「佐用町の郷土史家から、佐用町に法然上人の腰掛け石があるという連絡があり、どうしてこのような上人に関係のない町に遺跡があるのかと不思議に思ったが、そのような忠（ママ）（史）実や資料には、今までふれたことがないので、佐用町

を訪ねた。田園で種まきをしている老人に聞くと、西山というところに変った石があるらしいと、教えてもらった通り、うねうねとつづく町の道を中国縦貫道路にそって西の方にいくと、その道路のわきに石碑をみつけた。その立札に「法然上人腰掛け石」と記されていた。その石碑の表には、「法然上人腰掛石」とはっきり読むことが出来た。十五歳のとき美作の国から、比叡山へ勉学に向かった法然上人は、八十歳でなくなるまで故郷には一度も帰っていない。それだのに、このような腰掛け石が、どうして残っているのかと、半信半疑に思いながら木の立札を読むと、そこには『法然上人は美作の国を出て、比叡山に登って浄土宗を聞いたが、その後、度々故郷の美作の国に帰っている。そのときは、いつもこの地を通ってこの石に腰をおろしたのである。村人たちは、この上人のすが（た）にふれて親しくなっていた。それで、後世この石を腰掛け石と名づけて保存するのである』とある。この伝説によると、上人は度々美作の国に帰っているのである。佐用の人たちとは心やすくなって、腰掛けている上人のところに集まったらしい。上人の伝記をみてもこのようなことは何も記されていない。立教開宗後、上人は美作の国から、母と本国の師の観覚得業を、京都に迎えて孝養をつくしたことが九巻伝のなかにあるが、それもはっきりしていない。この腰掛け石のことは、如何なる伝記にもない。この腰掛け石は、法然上人の伝説として、はっきり佐用町に残っているので、村人たちが拠金してこの石碑を建てたと記している。たまらなく嬉しかったのは、その横を中国縦貫道路が作られたのに、よくぞ残してくれたと合掌しながら、よろこんだ。今のうちに宗門でなんとかこの石も保存して欲しいと思った。それから二、三日がすぎて、佐用町に行くと、腰掛け石は屋根が出来ており、花筒に美しい花があげられている。誰がこのようにしてくれたのであろうかと思い、石碑の横の札を読むと、屋根と花筒をつくってくれた寄進の人の名前があった。それは兵庫県上郡町の真宗の寺院とその門徒である。時々真宗の門徒が、ここにお参りするとのことであった。真宗の門徒の信心の深さに強く心うたれたが、浄土宗の檀信徒もお参りしてほしいと思ったことである。これで腰掛け石も、後世まで残るのではないかと

思って安心している。」（法然上人讃仰会『浄土』一九八八年、六月号）

高橋報告の検証

ア　腰掛石へのアクセス

まず、佐用の法然腰掛石であるが、佐用町商工観光課に問い合わせたところ、正確な場所が判明したので記しておく。筆者はすでに三回訪問しているので、迷わずに行くことができるが、初めて行く人は、以下の道案内を参考にして欲しい。「法然上人の腰掛石」は、県道三六五号線沿いにある。道路沿いに立っており、明確な住所がないため、「佐用ＩＣ」からの道順を記す。佐用ＩＣを出て右折し、国道三七三号線を南下する。三キロメートルほど行くと上町（かんまち）という交差点に突き当るので右折し、国道一七九号線を西に進む。「西山橋」という交差点（右手に「盛々亭」という飲食店が見える）を右折し、県道三六五号線に入る。盛々亭の電話番号〇七九〇-八二-三九八四をナビにセットしておくと迷わないで済む。そのまま車で一～二分ほど進むと、右手に「法然上人の腰掛石」がある。

ＪＲでいく場合は、津山方面からだと、作用を下車、進行方向へ左に出て、約一〇〇（メートル）左へ進むと、時代屋という食堂があるのでそこを右折、川の橋を渡ってすぐ佐用共立病院下の信号を右折、約三五〇（メートル）先の盛々亭の信号を左折、しばらく道なりに進むと腰掛石がある。徒歩で行く場合は、佐用駅から二〇分くらいである。

イ　中国縦貫道の工事で移されたのか

つぎに、高橋は中国自動車道の建設に伴う工事で、この地へ移されたのではないかとの推測をしているようであるが、後に述べるように、明治の中期に中世美作道が拡幅された際に、道路沿いの腰掛石が、現在の位置に移されたと考えた

ほうが自然である。中国自動車道は腰掛石のすぐ上を通っており、一九八三年に全線開通しているが、石碑に明治二五年と記されているので、高速道路工事に伴って、現在地へ移されたと考えるのは不自然である。

ウ　上郡町の真宗の寺院

次に、高橋が聞いた上郡町の真宗の寺院を調べると、明福寺、西光寺、浄光寺、法雲寺、福泉寺の五箇寺であるが、本稿執筆時点では、まだ寺院の特定に至っていない。真宗の檀信徒がお参りをしているというので、聞けば分かるのではないだろうか。二〇一七年五月に訪問した時に、腰掛石の西方にある浄土真宗の浄宗寺へ行って聞いてみたのであるが、真宗の檀信徒がお参りしていることはそのとおりだが、その寺院の名前や、後で紹介する碑に刻まれた、御詠歌の主である「妙善寺」は知らないとのことであった。法然上人が、ここで法話をしたという言い伝えは、筆者が二回目の訪問の前年、二〇一六年に、作用の西のＪＲ上月（こうづき）駅からタクシーで行ったのであるが、その運転手は法話の伝説については知っていた。言い伝えとしては、かなり広範囲に知られているようである。佐用町観光協会のハイキングコースに、腰掛石が、最後のランドマークとして登録されてもいるのである。このことは、前著『法然上人生誕の地　美作国に関する研究』でも記した。

エ　筆者は佐用町教育委員会へも聞き取り調査を行った

高橋は、一度訪問したあと二、三日して再訪問すると、急に屋根が出来、花が生けられていたと記しているが、まるで奇瑞の相が現れたかのようである。おそらくその訳は、郷土史家が連絡をしてきた折に、改修計画があってそれが実現したのであろう。筆者が二回目に訪問した時にも花がいけてあり、枯れずにいたことが写真にも記録されている。二

○一七年一〇月末に三度（みたび）訪問したときには、さすがに花は枯れていたが、浄土宗寺院の袖山（本学理事長）と田中（学監・本研究所長）によって蠟燭と線香で弔われた。石碑の基礎部分が補修されていたことに関しては後述する。筆者は、高橋が聞いたという郷土史家がいないか、教育委員会に訪ねたのだが、昔の話なので分からないということだった。無理もない話ではある。その時に、佐用町の史料に、そのことが出ていると言うので、今回図書館を訪問し、美作道に関する資料を得、「法然の道」を再発見したのである。

今回調査による考察

二〇一三年九月の google 地図のストリートビューによっても、同地は確認できるので、参考手段として利用されるとよい。

ア　和歌の考察

和歌は、石碑本体の向って右側の面に刻まれている。（写真2）読むと、

「吉水と聞き々は　昔そ偲ばるる　御影をうつす　道野辺の石

私僧　妙善寺殿　詠歌」

とあり、妙善寺の関係者が詠った和歌を記念の腰掛石に刻んだのであろう。筆者なりに意を記すと、

「これが法然上人（吉水）の法話をせられた噂の腰掛石か。この道野辺に上人の御影が浮かぶようで、昔を偲ぶようだ」

写真２　腰掛石の和歌

となるのであろう。

建立の石碑の左側面には「明治二九年一一月三日」と刻まれている。発起人は白髭六左右衛門と読める。この文字は、石碑本体に向って左の面に刻まれている。（写真3）ところで、この写真の撮影は二〇一七年五月一五日で、写真のプロパティーにも記録されているのであるが、同年の一〇月二八日に、腰掛石を訪問した時には、腰掛石の左側面奥の下部が、セメントで補強されていた。写真の「発起人」の角の部分である。これは、誰かの手によるものであるが、この間、筆者は観光協会や教育委員会に、電話による問い合わせを行っていたので、不安定な石碑の下部を補強したものと思われる。この石碑の設置は、おそらく旧美作道の拡幅によるものであろう。

写真3　腰掛石の発起人

イ　中川駅家

美作道の当時の高速の交通手段として馬の利用があり、そのために設けられた駅家（うまや）は、馬の乗換え、文書の送達、宿泊、酒食の提供など、多様な業務を担っていた。駅は、原則三〇里（約一二〇キロ）毎に設置され、播磨国と摂津国は大宰府から京への基幹道・山陽道になる。駅家の数は時期により変遷があり、『延喜式』編纂時には、全国七道の駅数は四〇二、播磨には九ヶ所（山陽道本路七ヶ所、美作支路二ヶ所）、摂津国には二ヶ所存在したとされる。（寺岡洋「播磨の駅路・駅家と古代寺院（前）」、『延喜式』全七巻）

播磨広域連携協議会「はりま風土記紀行　古の播磨を訪ねて～佐用町編　その6」には、美作道の中川駅家について

次のような記述がある。

「現在の志文川流域の三日月町末廣に、『新宿』という大字地区があります。ここには、昭和四七年三月に県の重要文化財に指定された『播磨国　中津河』と刻印のある南北朝時代嘉慶二年（一三八八）建立の宝篋印塔（ルビは筆者）が残っています。……ここ中川の里には、山陽道から分かれた支路美作道沿いに「中川駅家」が置かれていたことが分かっています。『延喜式』には「中川駅家」は、馬数五疋と定められていますが、その比定地は……前述の三日月町末廣の新宿にあったと言われている新宿廃寺跡……が、中川駅家ではないかと、唱える人もいます。いずれにしましてもこの里は、行政上かなり重要な土地であったと考えられています。」

<http://www.harima-united.jp/column/climate/contents000220.html>

ここで推定されている三日月町末廣は、ＪＲ佐用の姫路寄りの駅で、佐用中心部から七キロほど南東の位置にある。

ウ　美作道における位置づけ

ここで「播磨古道をさぐる[2]」によって、美作道に関して立ち入った考察を加えよう。同史料によれば、現在の佐用町中心部の佐用高校あたりが、発掘調査によって、佐用郡衙のあった場所で、そこから十字路の形で北へ古代因幡道が、東西が美作道であったとされている。佐用の腰掛石はその交差点から西へ行ったところの、中世美作道沿いにあったと推定される。歴史上、中世因幡道の利用がはじめてみえるのは、平時範が承徳三年（一〇九九）因幡国司として赴任した際に通ったとされている。これは、平安時代後期の官人、平時範が記した日記『時範記』に記されているとされる[3]。これは、法然が生まれる三四年前の史実であり、このように、発達した公道が存在したことは注目すべきである。その場所は、当時の交通の要衝であった。この交差路の東に駅家が存在していたことは、きわめて自然なことであろう。さ

て美作道であるが、法然の時代より少し後になるが、後醍醐天皇の隠岐への流罪もこの道を通った史実が、法然の腰掛石伝承と重なっている。

話は駅家に戻るが、「播磨古道をさぐる」では、古代美作道が整備されたのは、備前の国の北部六郡を割いて美作国が出来てからだろうとし、延喜式によって越部（こしべ）と中川に各五疋の駅馬の数が定められているとしている。そして前述した三日月町新宿の中川の駅家に関して次のように述べている。

「駅は駅戸をもって構成され、その中から駅長一人を選ぶ。駅戸の中で家が豊かで事に敏なる者が選ばれ、終身制であった。駅には、駅田が付けられ、小路の中川の駅には二町歩（現在の二・四ヘクタール）の不輸租田があった。駅長は課役を免ぜられ、駅戸も徭役を免ぜられていた。収穫した稲は貸し付けて利息を取り、その利稲を駅の費用とし、公用使に食事と宿を供給し駅馬を買い揃え、飼料等を与えねばならない。駅馬を使うことができるのは、公用の使いをする官吏と緊急の公用文書の伝達者であった。この者は駅鈴または伝符を携帯していなければならなかった[4]」しかし、平時範が因幡に赴いた時には使用されておらず、彼は「佐余（郡衙か）に泊まっている」としている。

中世には、先述の駅戸の負担が耐え切れなくなり、駅制維持が困難になったからであろう。そういうわけで、筆者の近刊の『赤気の果てに　法然上人誕生の地に吹く朱色の風』の冒頭では、法然上人すなわち法然房源空は、郡衙に泊まったという設定にしたのである。「播磨古道をさぐる」では、幼い法然が京へ登る際、この道を通ったのであろうとしているが、これは腰掛石の伝承に基づくものであって、史実として残されているものではないが、法然が美作へ帰ったことを伝えていない直伝よりも、度々帰っていたという地元の伝承の方を信じたい。

あと書き

なお、高橋によって発見された腰掛石に、以上の伝承が記されていたという立て札は今もあるのであるが、文字が消えて見えなくなっていることは、まことに残念なことではあるが、ここに、拙い一文を掲載することで、後世へ伝えていくことが出来ることは、この上ない喜びである。本稿で調査することが出来なかった上郡町の浄土真宗と、御詠歌の作者・妙善寺に対する調査は、機会を改めて行いたい。筆者の聞き違いかもしれないが、浄心寺の住職は、姫路の遊園地の近くの妙善寺と言ったように記憶している。

冒頭で、熊谷直実が法然上人の命を受けて、両親を弔うために生まれ故郷の生家に寺院を建立したことの、時空を越えた、答えの出ない疑問に答えようとするのが本稿の課題であると言ったが、たとえ答えは出なくとも、法然の腰掛石は、その蓋然性を証明していると言える。

また、法然上人の出自に関しては、冒頭に紹介した『作陽誌』によって、直接・間接のさらに詳細な情報を得ることができる。しかしながら、如何せん、この白文で書かれた漢文の解読には、気が遠くなるような時間と労力を要する。また、角川書店の『日本地名大辞典』と『日本古典全集　延喜式（全七巻）』によって、間接的な情報を得ることができよう。こうして、法然上人の幼少・青年期に育まれた情緒形成のリアルなイメージに接近することが出来ると考えるが、これは自ずから今後の課題となる。

注

1　高橋良和「佐用町の腰掛け石」法然上人讃仰会『浄土』一九八八年、六月号所収

2　佐用郡地域史研究会編『播磨古道をさぐる』二〇〇二年七月

3　木本好信「『時範記』と平時範」（『平安朝日記と逸文の研究』桜楓社、一九八五年）
4　前掲『播磨古道をさぐる』三一ページ

参考文献

寺岡洋「播磨の駅路・駅家と古代寺院（前）」『むくげ通信』二六三　むくげの会　二〇一四・三・二九　播磨の古代寺院と造寺・知識集団　30
瀬川久志『法然上人生誕の地　美作国に関する研究』ＫＤＰ出版、二〇一七年
中村太「山陽道美作支路の復原的研究」『歴史地理学』一五〇　二二～三四　一九九〇・九
寺岡洋「美作道沿いの古代寺院」揖保郡・讃容の古代寺院　を歩く　―　「むくげ通信」二五五　二〇一二・一一　》
「古代の道「美作道」「因幡道」の駅家（うまや）を辿る（郷土史の談話　六二）」
＜http://kdskenkyu.saloon.jp/tale62mid.htm＞（二〇一七年一二月二七日アクセス）
『新訂作陽誌　西作誌（上中下）　東作誌（一～五巻）』（国会図書館のデジタルコレクションで参照できるので参照されたい。）

キーワード：法然上人、法然房源空、共生、腰掛石、佐用町、誕生寺

（せがわ　ひさし　東海学園大学経営学部　教授）